

# 天 候 語 彙

千 葉 徳 爾

“ことば”は民衆の中から生れ、そして成長してゆく。だから、その日常使用している言葉には、人々の生活と思想が含まれており、ほかから与えられた言語などというものを、そのままだまって使っていることはなかった。たとえば天候についての語彙から、われわれは一般の日本人が、この自然現象をどのように受けとり、考慮していたかを理解することができる。これまでも、天気予報は不親切だとか当たらないという批難が多かった。そのうちには予報の性質についての無理解も多いが、また一方からいえば予報は日常生活のための予報であって、それから超然とした性質であるべきものではないであろう。民衆の要求する、生活面への顧慮をもった予報ができなくては意味をなさない。その不便さを感じる故に従来の予報が批難された点も認めねばなるまい。たとえば、雪というものを民衆はその労働・生産の制約性に着目して考えている。語彙を見ればわかるように、季節はずれの雪について、さまざまな新語が生れているのはそれを物語っている。ところが、気象台や測候所は学問の府であり研究の機関であるという面のみを強調して（これはある点で必要不可欠であるが）、雪とは気象学上の定義に従うもののみをさすと考えていたとすれば、そこに大きなギャップが生れるのは当然である。

ここに集められた語彙は、私たち民俗学徒がその研究資料として採録したものである。したがってその目的による取捨があり、また極めて量的にも乏しいものであるが、前述のような意味で気象関係の方々の御参考にもなるかと思つて配列したものである。したがってただの訛などは入っていないし、非実用的な諺に近いものもある。また量的には一部の老人などだけが用いるにすぎぬものも含まれている。それは社会学的な大量把握でなく、文化的歴史的な民族構造を考察しようという民俗学の要求からの制約といえるが、なお、民衆の生活と思想をつらぬくものが何であるかは推察できよう。

その一般的特徴を述べるならば、新しい言葉が多いということである。労働や生産は絶えず新しい姿をとる。それに応じて“ことば”すなわちその表現・傳達手段も変らねばならない。国文学者などの論ずる日本語ではなく、生きた言語がここにある。系統は古くとも、少しづつの型式をかえて異なる意味をもたせているのであつて、大阪府南部で夜晴れて昼降る天気をヤッコビヨリ、その反対をオヤカタビヨリというごときは、それをいいあつて笑っているヤッコすなわち農家の作男たちの姿が

目にみえるようである。この言葉ができた時代の大阪近傍の農村ではすでにヤッコは農奴ではなく下男・奉公人であつたけれども、それ以前からの賦役の形式と非能率とはやはり存在した。雨休みが喜ばれる程度ののんびりした気持があつたのである。現在はオヤカタもヤッコもすでに死語となつて大阪市近郊の商品作物栽培地ではこの言葉は既に内容を失つた単なる特別な天候の呼名としての意味しか持つまいが、なお、山間や離島の農家には同じ心持が傳つているにちがいない。そのようなものとして農労働の特性を洞察した上に立つて天候の予報が示されることこそ望ましいことと思ふ。

この資料には「増補風位考資料」などに掲げられたもの以外は柳田国男氏のカードを利用し、多少の筆者の考えを加えたものである。時期は大体昭和19年ころまでの資料であるから、以後の調査によって加らべきものが多いと思ふが、取敢えず資料の1例として示す意味でこれだけに止めた。配列は大体、雲・霧・雨・雪・霰・氷・霜・風・虹・光現象・日時・天気・季節とし、その内部では1年間の季節にしたがって述べることにしたが、多少前後混乱した点があるのは筆者の下手際による。これに増補して少しでも日本の平凡な常人の天候についての心理や考えかたが明らかにされ、予報がそれに適合しつつ全体の水準を向上指導してゆく一助ともなることを願うのである。

カゼママ 宮城県遠刈田地方にて、風が吹くとき藏王山の上空に雲の丘のようなものが覆う。これが北進するとますます強くなり、南進すると止む。(旅と傳説12巻5号)

アメドイ 埼玉県入間郡宗岡村など。雲が空の果に堤防状になること。雨ドイがかかると近く大雨が降る。ドイは土居で堤のこと。(むさしの1号)

ドテグモ 千葉県君津郡にて、夏日西方に堤防状の雲が出るると明日も天気がよいという。

サルッポ 日の入りに猿の尻のような雲(色か?)が出るのをいう。サルッポが出ると雨になる。奈良県生駒郡。

ミツバサ ろろこ雲。これが出ると雨になる。ミツバサグモの略か。広島県の1部。

ナガワタシ 神奈川県平塚付近にて、細長い帯のような雲。富士山の前へ長渡しが出ると天気が変る。(旅と傳説13巻8号) 富士山の笠雲や腰雲は富士のよく見え

る地方で天気判定の目印となっている。

オニグモ 夏の入道雲。積乱雲の高く発達したもの。  
山口県土関。広島県江田島。

イヨタレグモ 愛媛県青島にて東方に出る積乱雲。

イヨタロウ 山口県屋代島で東南方四国山地から出てくる積乱雲をさす。イヨタレは伊豫太郎か。

アワタロウ 香川県志度島で南に出る積乱雲のこと。  
阿波太郎の意。

ビツチュウタロウ 同じく北方に出る積乱雲。

アキタロウ 広島県上蒲刈島にて北方中国山地に出る入道雲。

タンパタロウ 兵庫県北部にてその方向に当る入道雲。

イズミタロウ 同じくその方向に出る入道雲。

カツレ 朝霧。山口県豊浦郡。

ナゴ 霧。伊豆半島でいう。

ヨキネブリ 初春に暖い気流が地上の雪に接してもやを生ずる現象。新潟県西蒲原郡。

ジケブ 地煙であろう。千葉県山武郡白里村。

アゲブリ 雨が降っては止み、休んでは降るをいう。  
神奈川県津久井郡。

マツボリアメ いわゆる私雨のことを阿蘇地方でこう呼ぶ。(民俗学5巻7号) マツボリは家族の私財をいう。

ヒトクモアレ 驟雨。新潟県北蒲原郡加治村。

ゴキアライアメ 郷社八幡神社の祭礼の翌日もしくは翌々日に降る雨。(青森県野辺地地方方言集) ゴキは祭の食器のことであろう。

シブチ 寒雨。(土佐方言)

キノメオコシ 早春の雨をいう。徳島県祖谷地方。

サクラナガシ 旧2月に降る長雨。山の神が花を流すのだと説明される。(喜界島方言集) ナガシ・ナガセは霖雨のこと。

シカノチナガシ 長崎県五島の中通島で灌仏のころ降る雨。鹿の出産後最初に降る雨の意という。(野鳥9巻1号)

キノメナガシ 木の芽の出るころの長雨。鹿児島県肝属郡。

タケノコナガシ 竹の子の出るころの長雨。千葉県印旛郡。

ショウブナガシ 旧5月ころの大雨。宮城県石巻地方。

アシジロ 足白である。大地または水面に当って白くはねかえる勢ある大雨。(豊岐方言集)

アセモガラシ あせもが汚込む意。夏の小雨を岡山地方でそういう。(岡山県方言集)

ナベワリ 8月ナガセともいう。旧月の長雨を四国の東部でそう呼ぶ。薪尽き果てる意という。

オウザラク タ立のこと。新潟県南蒲原郡見付附近

(高志路1巻11号) ザラクは風雨のこと。津軽地方でもジャラクという。新潟県頸城郡地方ではこのとき漂着する木片もまたこの名で呼び、裏日本北部全般の名らしい。佐渡でも秋田でも大雨のことで、音から来た語であろう。シグレも同様である。

オニアライ 初秋の朝方降る雨。(但馬方言集)

ババオドシ 時雨。佐賀県大江付近。

シモアレ 秋田県平鹿郡十文字町付近で霜が降るとシモアレという雨が降る。(郷土7巻4号)

シモギヤシ 霜返し。大霜の後に雨が降るのをいう。(豊岐島民俗誌)

ユキカタリ 霰のこと。カタルは加わること。岩手県遠野地方。(遠野方言誌)

ミソテキ ミヅエキともいう。霰のこと。水雪の訛か。新潟県頸城郡の海岸地方でこういう。(頸城方言集)

ユキオロシ 降雪直前の雷鳴。10月初ころ1度だけ雷が鳴る。これを降雪の合図とした。(頸城方言集)

ユキオコシ 愛媛県喜多郡で冬季西方に雷鳴すると「雲起し」といって霙が降る。諺に近いもの少なからず。

カサユキ・ミノユキ 新潟県米山で12月初の初雪が山頂からどれだけの高さまで降るかでその年の雪量を予想する。全山をおおえばミノユキで今年は大雪だと噂する。(高志路2巻7号)

センワタシ 鳥取県八頭郡で付近の最も高い山に初雪の降るをいう。センは峯のこと。

テヅチオドシ 早雪。(ひだ人2巻13号) テヅチは手づつすなわち甲斐性なしのこと。町ではシシクタルオトシともいう。

シナノオバサ 雪の異名。愛知県北設楽郡にてこういう。

シオテ 少しバラバラと降る雪。神奈川県津久井郡東部。

カザハナ 同じものをこの地方西部でいう。

コザキユキ 粉雪。秋田県仙北郡。(民俗学5巻)

ブリオコシ 能登半島羽咋地方にて、年の暮ころ1週間もつづいて風雪する。このころぶりが豊漁である。

ヒタキ 吹雪。今日はヒタキで戸もあけられぬなどという。下北半島など。ひたゆきであろうか。

ハテユキ 春に降る雪。終雪であろう。滑りやすく、なだれになりやすい。(山の生活)

コトリコロシ 3月以後の雪。(但馬方言集)

タナハズシ 3月ころの大雪。青森地方の語。

ヒバリコロシ 青森県野辺地にて4月の大雪をいう。

ツツゴオトシ 新潟県東蒲原郡東川村にて2、3月ころの雪。既に薪が尽きて「ツシ」すなわちいろりの上の棚をおろして焚かねばならぬからという。

カエロメガクシ 同地で4月の雪。

オノハガクシ 5月に降る雪を同じ土地でいう。

ガンノメカクシ 秋田県男鹿半島にて早く来る雪。(牡鹿の寒風)

ツルゴオトシ 旧2月の雪を同じ土地でいう。

ハリマブリ 旧3月の雪は薪が尽き屋梁ばかり残っているとの意。同じ半島。

ダオノスネキリ ダオは朱鷺のこと。地上の雪がまだらにとけたころ降る雪。ダオがこのころ来るといふ。やはり男鹿半島。

コメゴ 霰。福島県石川郡。

サンマル 霰。秋田県仙北郡山地にてマタギがいう。(仙北山ことば)

コオリ 同上雹のこと。

テンジャク 広島県双三郡で雹のこと。

スマル 氷柱のこと。山口県岩国地方。

スグリ 氷柱。長野県東筑摩郡。ズツタレともいう。

ツララの語も古いものではなく、東北でタルヒ、九州でタロメ・ナンジョウ・ヨウラクなど各地で名を異にする。子供があそびものにするので面白がって名をつけたかと思われる。

マガンコ 九州久留米地方で馬鍬の子(齒のこと)という。使用中の馬鍬の刃の白い光から連想したのである。大分県大分市周辺でもモウガンコ・モガンコという。

ヌキンダレ 軒の垂氷の訛。長野県上田市付近。

タリンコ 福井県足羽郡で垂氷のこと。

ナリシロ 樹氷。奈良県宇陀郡。

シラブ またはヒラブ。福島県・山形県の境界地方でいう。白布という字をあてる。白布高湯など。(山岳20巻3号)霧氷のことである。

フキワケ 四国地方の高峯でいう。

サドオシ 阿蘇地方で4月の霜をいう。サドはすかんぼの類。

コッケジモ アラシモともいう。大霜のこと。(民俗学5巻7号)

シモザヤ 奈良県吉野郡北山村で霜柱のこと。

シモダイ 霜柱。奈良県吉野地方。

シモダケ 霜柱。徳島県祖谷山地方。

タカイテ 霜柱。高凍てである。千葉県山武郡千代田村。

ヒャクゴノシモ また略してヒャクゴ。会津盆地や青森県五戸地方で、大寒の後105日目の霜をいい、3月ころ霜祭をした。(高志路5巻3号)

アマアマヒデリ 雨のつづいた後に早となること。(但馬方言集)

ヒカゼ 日が照って吹く風で、田の水が潤れやすい。香川県仲多度郡。

イシオコシ 強烈な大風。鹿児島県肝属郡。

タツ 突風を黒部地方でいう。

テッポウオドシ 大風の急に吹いてすぐ止むもの。(続壹岐島方言集)

シカノツノオトシ 壹岐島で春に吹く西の強風。

ハルノヒトエニシ 春の西の強風。但し1~2日しかつづかないものを同じ地方でいう。

メカブオトシ 春4月ころの風。壹岐地方。メは海草のこと。石川県江沼郡の海岸でもメカブオトシは5月和布の根をとる海の荒れをいう。

ハナチラシ 広島県三津町で旧2月中旬に吹く強い強い西風。割合に低く地上を吹くので焚火の灰をちらすという。

イワシカゼ 春の土用中に好天気で北風そよそよ吹くをいう。苗代ごしらえの季節で、やがて田植でナマグサを食う日が来る。ナマグサはイワシなど浜でとれる魚をいい、浜で鰯の漁があるだろうなどうわさする。新潟県南魚沼郡六日町付近。

カラシバナオシ カラシバナは菜種の花。このころ吹く南風で、ハルイチバン・ハルイナともいう。壹岐島。ドホラカゼ アイノカゼのこと。青森県五戸地方(民間傳承4巻7号)

マミガラニシ 旧の9月ころ喜界島で吹く強い北風。この地方では普通大豆(マミ)は旧月に取入れるが、マミンカーという大豆はこのころ収穫する。その豆の殻を吹飛ばす北風の意。(喜界島方言集)

ラッパチ 蠨八であろう。秋から冬にかけ吹く暴風。静岡県浜名郡。

ナベノツル 飛驒山地で虹のこと。(人類学雑誌1巻6号)秋田県仙北郡(旅と傳説1巻6号)千葉県印旛郡、三重県度会郡などにもこの名がある。この下を掘ると金があるなどとも伝える。

ジエクノカマノツル 虹のことを富山県射水郡櫛田村でいう。

ナベヅル 虹が端から端まではっきり現れたものを千葉県印旛郡では今日の虹はナベヅルだという。これに対して1部だけ現れたものをボッカニジという。ボッカは大株のこと。(旅と傳説13巻11号)

カワナガレ 虹。大分県大分郡。

タイコバン 虹。大分市。

アサヒノコ 朝虹。長さ1間ほど。アサヒノコが出たら3日中に港をたずねる(入港する)。ユウヒノコがさせば漁師は3日助かるといふ。天候の良否をいうのである。山口県見島。

サルッピー 日光が雪に反映して虹の如く光彩を生ずるもの。(幸手方言)

コヒ 小日である。日出・日没時に太陽の傍が虹のような色で1点光りかがやく。コヒが見えると近日中にし

ける。北海道登別付近。(幌別漁村生活誌)

ワミウジ 輪虹。日月に暈のかかるもの。高知県。

イタチビ 朝日の光が黄色くみえるとき。雨の兆である。長崎県飯ヶ浦村。

ソコボシ 光のない星。ソコボシが出ると雨になる。長野県上伊那郡。

ヒノノキ またシノノキ。日の軒で眞晝のこと。(頸城方言集)新潟県西部頸城地方の海岸1部でいう。

アケクレ 日中ではあるが夕方近い時刻。(鳥取方言集)

ムコダマシ 夕照。広島県比婆郡峯田村。

ヒハヅリ 日が山に入ること。またその時刻。(ひだ人6巻11号)岐阜県大野郡岩井谷村。

ウバコロシ 遠山の頂にのこる夕映。隠岐島前。(高志路7巻7号)

ガマガトキ 夕方のこと。飛騨高山にて。「カガモ」すなわち幼児が化物をいう言葉と関係があるらしい。

アコクノコ 夕暮。熊本県葦北郡。その他ヒクレマダレ、ケソメキなどの語がある。

イチノクラミ 夕方薄暗くなるころを鳥取県八頭・気高郡地方でいう。節分の日のイチノクラミに書物をよむと鳥目になるという。

ヨイイチ 日没後2~3時間をいう。隠岐島後。この時間は非常によくイカがつれるのでイカの宵市かといわれる。

イドホリボシ 雲の間にポッポッと星がみえること。翌日は雨。静岡県榛原郡・小笠郡。

メクラボシ 雲にすかしてぼんやり星がみえる。これも同地方で雨の兆。

ヨノキ 月で夜景がみえること。新潟県村上地方。

ヤッコビヨリ 晝間降って夜晴れる天気という。下男が労働しなくてすむからであろう。(大阪府泉北郡)

オヤカタビヨリ あるいはオヤカタジナミ。シナミも日和のこと。ヤッコビヨリの対語で、夜降って晝晴れるからである。

オウビ 上天気のこと。朝曇りはオウビのもと。(防長史学2巻1号)

ソラヅキヨ 空が曇っているながら月のため明るくみえる夜。長野県南佐久郡。

キノメツワリ 木の芽が出るころの暖くだるいような気候を、奈良県宇陀地方でいう。ツワリは生気がめぐむ

こと。

ティルハンニ ティルは背負籠、ハンニは「かるう」すなわち背に負うことで奄美大島で季節の名。野原から籠を負うてかえるとき、ブリーという星(すばる)が額越しに山の端にみえるのである。麦まきの季節おそろくこの籠は負紐を額にかけ、うつむいて負うのであろう。この地方の運搬法はアイヌとにている。

ヨメオドシ 旧8月ころ急に寒くなる気候をさす。大分県築上郡。

ウバオドシ 佐賀市付近で同じ気候にこの名がある。

ショビタレオドシ 新の9月上旬に23日急に寒い日がつづくのをいう。三重県志摩郡。(郷土研究7巻6号)

ピッタレオドロカシ 11月の初に時ならぬ雪が一寸降ること。島根県邑智郡田所村。このころは稲も刈らねばならず、麦もまかぬばならぬ忙しい時である。ピッタレはなまけること。

シモアゲ 霜のはげしい朝。快晴でひるころから曇るのをいう。熊本県玉名郡。

クロシモ 冬の朝、雲があつて霜がおりぬがしかも寒さのきびしいのをいう。鹿児島県大隅半島高山地方。

ブリオドシ 能登半島七尾地方で11月中旬から下旬に北風が一荒れあれて木の葉をゆり落すころ、ぶりがとれだす。雷が鳴り、みぞれが降って寒い。

ドンクビヨリ 寒中であるが生暖かく薄曇った日をいう。阿蘇地方小峯村にて。(肥後方言集)天草島にもこの語があるらしい。ドンクは曇ること。

ドロカン 寒のうちに丑の日が3回あるのをドロ寒といい、寒中暖いという。秋田県平鹿郡十文字町。

ジカン 次寒また地寒などと書く。寒明けて30日を余寒、その後30日を時寒という。これより鮮来ると北海道松前、福山地方でいった。(千鳥の磯)また同じころ八郎瀧の漁人は春分より清明のころまでを地寒といったとある(氷魚の村君)が、遠く千葉県印旛郡の東部でも寒明けから彼岸前後までをさしてジカンと呼んでいる。(旅と伝説13巻11号)

〔追記〕 民俗語彙は発音通りを原則としたが、発生系統によって理解するためには歴史的かなづかいによる方が適当と考える。記述に現在形をとったのは調査された当時使用されていたものであって、現在死語となったものもあろう。(信州大学地理学教室)

書評

Klimat Iaponii. G. N. Witwitskii  
13×20 cm 175頁 1954年 Moscow 290円

一般的な解説をした日本に関する気候誌。図は新日本気候図帖・雪の気候図帖・大後編農業気象図便覧などからとり、動気候的な説明は Thompson (1951) の南

東アジアの研究から多く引用している。われわれに新しい知識を別に与えるわけではないが、文献や資料の代表的なものを日本の1950年、ソ連・ドイツ・イギリス・アメリカのは1952年位まで殆んど集めていて、逆にソ連の気候誌を日本の学者が書こうとする場合を一考せざるを得ない。(mlk)